



まゐとりの मैत्री

No. 2 平成20年度 秋号 - 2008. 10. 7 -
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitri (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

暑さと激しい豪雨に象徴される夏でしたが、皆様いかがお過ごしになられたでしょうか。大学は試験期間を経て、8月・9月と夏期休暇でした。勉学や旅行、アルバイトや親孝行など、この二ヶ月は学生にとって日頃行うことのできない活動を通じて、自己を高め活力を大きくする大切な時期です。仏青・仏教会では、群馬・仁叟寺(曹洞宗)において夏期研修旅行を実施しました。今号はこの研修旅行を中心に報告させていただきます。

～ 夏期研修旅行報告 ～

9月18日、午前10時過ぎに高崎駅に待ち合わせ仁叟寺へ。ご住職による開校式・訓辞を頂いた後、国特別史跡多胡碑記念館の見学や坐禅、総会、懇親会を行った。翌19日、早朝坐禅や作務、閉校式の後、バスにて一路伊勢崎・太田方面へ。国指定重要文化財の埴輪を納める相川考古館や、徳川家発祥の地にある長楽寺、縁切り寺として有名な満徳寺の資料館を訪問見学した。

仏教青年会の合宿に参加して

まず、群馬県の吉井町に着いた時に改札機がなく人が切符を切っている事に驚きました。また、目的のお寺までバスか車で移動なのだろうと思っていましたが、歩きで移動だったので、さらに驚きました。

1日目で一番記憶に残っていることは坐禅をしたことです。初めての体験だったので緊張していましたが、いざ始めてみると何とも言えない不思議な感覚になって楽しかったです。それから、先生が買ってきて下さった線香花火も凄く綺麗で、密かに感動していました。

2日目は縁切り寺の満徳寺の事が印象に残っています。昔の離婚の仕方は至ってシンプルだと思いました。しかし、いつの時代になっても離婚についてなど、考えることは同じなんだと思いました。

泊まったお寺にいた犬が凄く可愛かったです。

(インド哲学科1年 富田弘輔)



【目次】

夏期研修旅行報告	……1	コラム「日本文化と仏教」①	……7
前田専學先生講演録②	……4	書籍、イベント紹介	……8
コラム「仏教人物列伝」①	……6	今後の活動予定	……10

群馬研修旅行を終えて

計画に携わった者として、まずは無事に旅行が終わったことに安堵している。前日までの天気予報では台風が近づいているとのことで心配だったものの、蓋を開けてみれば始終曇りで済んだ。

今回の研修旅行は「せっかく群馬に来るのなら、群馬のことを知ってもらおう」という個人的な思いもプランの中に取り入れてみた。なぜなら、多くの仏青会員が群馬に来たことがないとのことであったからである。多胡碑記念館や長楽寺、満徳寺などをプランに含めたことで、参加された方々に群馬に触れてもらえたのではないかと思う。もしも参加された方々に「楽しかった」と思って頂けたのであれば、計画に携わった者としてこれ以上に嬉しいことはない。

最後に、参加者にとって今回の旅行が実りあるものとなったのは、ひとえに、仁叟寺さん、長楽寺の案内をして下さった小此木さん、満徳寺を説明して下さいた高木館長のご協力の賜物であり、心から御礼申し上げたい。

(インド哲学科4年 相川裕保・仏青副会長)



「仁叟寺と田中田鶴麿の碑」

今回の東洋大仏教会・仏教青年会の研修は、群馬県の西南にある吉井町の曹洞宗・天祐山公田院仁叟寺で行った。この寺は私の実家であるが、坐禅堂や研修施設もあるので、しばしば大学の研修なども行われる。そこで初回の会場としてお願いした次第である。

この寺は室町時代の初めに奥平氏によって創建された古刹であるが、その中に比較的新しい田中田鶴麿上座の墓碑銘がある。その墓碑銘の存在を私は最近まで知らなかった。

今年の春彼岸、わたしは仁叟寺に墓参に出かけた。当日はあいにく激しい雨が降っていた。その日、実父に東洋大学の仏青の歴史などについて話をしたところ、当寺にも哲学館で学んだ弟子がいること、その人の墓と墓碑銘もあることを初めて聞き及び、早速にその墓碑銘を見学に出かけた。生憎雨で濡れていたため、はっきりとは読めなかったが、「哲学館」の名ははっきりと確認できた。

今回は仏青・仏教会の研修で、再び仁叟寺を訪れ、この碑文を改めて読んでみると、次のように次のような内容が刻してあった。



明治7年(1874)5月生まれ、高崎の士族の子。二歳の時父と死別、仁叟寺27世真壁禅海の養子となり、英和学校・曹洞宗中学林で学ぶ。その後上京して、慶応義塾、さらに早稲田専門学校(現在の早稲田大学)、哲学館(現在の東洋大学)にて研鑽し、同校を卒業、日宗小檀林で文学を収めたが、病を得て、明治33年(1900)7月2日に病死。(『天祐山仁叟寺誌』同誌編集委員会編、p.157、166参照)

田鶴麿は仁叟寺の徒弟となったが、その才を見込まれ、上京して、駒沢や慶應、早稲田などから転じて、草創期の哲学館に学んだこと、わずか26歳で病没したことが分かる。この墓碑銘は、仁叟寺歴代の弟子たちが祀られてある卵形の石塔(卵塔)とは別に少し離れたところにあった。脚下照顧、改めて歴史の縁を感じた次第である。

(インド哲学科教授 渡辺章悟・仏教会会長)



(左：仁叟寺での集合写真、右：長楽寺山門での一コマ)



～ その他の活動 ～

去る6月21日、東洋大学井上円了ホールにて聲明公演、奈良・長谷寺勤行「ほとけへの祈り」が開催され、東洋大学仏教青年会も微力ながら協力させていただきました。本公演では、真言宗豊山派、迦陵頻伽聲明研究会の皆様によって、長谷寺で毎朝行われている勤行の再現と、現代作曲の太鼓曲『六大響』の演奏が行われました。聲明は旋律が美しく神秘的、『六大響』に迫力と力強さを感じたなど、参加された方々からも大変なご好評をいただきました。

講演「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と仏教」

（財）東方研究会理事長 前田専學（講演日時：2008年4月23日）

第二回

ハーンは何を求めて日本にやってきたのか。動機は何だったのか。



1889年12月頃、ハーンが39歳のとき、ニューヨークに滞在中に『ハーパーズ・マンスリー』誌の美術主任W・パットンと出会い、日本の美術と文学について語り合い、その折、ハーンは彼に日本取材を勧められました。その後ハーンは日本行きの企画を送り、パットンはその実現に尽力することになります。

ではなぜハーンは、パットンの勧めにのったのか？ いろいろ理由があると思いますが、まだ推測の域を出ないようです。最近の研究によりますと、一つには、1851年のロンドンで開催された万国博覧会に東洋の物産が数多く展示されて注目を集め、以来、オリエンタリズムが時代の風潮となっており、ことに日本は東洋の中でも雑誌の読者の興味を引くものになっていたということ。さらにはハーンもかねがね日本に行くチャンスを掴みたいと思うようになり、インドから送られてくる父親の手紙などから親しみを覚えていたインドを経て、生まれ故郷のギリシャへ旅する夢の実現の足がかり

にしたいとも考えていたこと。以上のような理由が考えられています。

これらの理由を否定するつもりではありませんが、私は重要なもう一つの理由があったのではないか、という気がしております。

ハーンは、書物だけで勉強していたのではいけない。仏教を実際に見たい、触れたい、知りたい、そのように思ったのではないか、と思います。

ハーンには十数冊に及ぶ日本関係の著作がありますが、中でもみずみずしい感動にあふれた最初の日本印象記『知られざる日本の面影』は大変好評を博し、一躍彼の名声を高めました。その中に「東洋の土を踏んだ日」という一文があります。

1890年（明治23年）4月4日、日本到着早々の横浜の周辺がこの作品の舞台です。彼はさっそく横浜の町にくだりました。

「テラヘユケ！」

私は洋風の旅館へ戻らねばならなくなった——昼食を食べる時間さえ惜しいのだから、そのために戻ったのではない。お寺へ行きたいという希望をチャ（=車夫の名前）に分からせることができなかつたからである。やっとチャにそれが通じた。旅館の主が、神秘に満ちたその言葉を言ってくれたから——

「テラヘユケ」

作品のなかではローマ字で「Tera e yuke」とありますが、これは彼が最初に語った日本語だと思われます。昼食もとらずにお寺に行きたい、という彼の気持ちを考えますと、仏教に強い関心を持っていたのではないかと私は思います。しかも、かなり仏教に関する深い知識を持っていたようで、それは日本に来る10年ほど前から蓄積された知識だったと思われます。ハーン来日の動機の重要な一つに仏教を見たい、知りたいという好奇心があったと考えられるのです。

「東洋の土を踏んだ日」によると、ハーンはチャの人力車に乗って横浜のある寺を訪問いたします。その寺で偶然アキラ（真鍋晃）という青年と出逢い、二人の間で交わされた対話は、ハーンがアメリカで得てきた仏教の知識を知るのに有益です。

「あなたはキリスト教徒ですか？」

「いいえ」

「仏教徒ですか？」

「厳密には、そうとはいえません」

「仏様(Buddha)を信じていないのに、どうしてお供えをなさるのですか？」

「私は仏陀の教えの美しさを崇め、それを奉じている人たちの信仰を尊いものに思います」

「イギリスやアメリカにも、仏教徒はおりますか？」

「すくなくとも仏教の思想に関心を抱いている者はたくさんいます」

するとアキラは、床の間から一冊の小さな本を取って、私にごらんなさいという。それは、オルコットの『仏教教義問答』の英語版であった。

アキラがおそらく自慢げに見せたこの本は、じつはハーンが来日する前の1886年に、すでにそれに対する批判的な書評を新聞に発表していたもので、1885年6月にニューオリンズで入手した同書が、かれの日本でもっていた蔵書である「ヘルン文庫」（富山大学）に収められています。

興味深い彼らの会話の続きは、本をお読みいただきたいのですが、ハーンはさらに寺の住職に19世紀当時のインド学仏教学の錚錚たる学者の名と著作を挙げて解説しています。例えば、英国のミュラー（F. Max Muller 1823-1900）を編者とする『東方聖典叢書』の中の仏典の翻訳や、英国のビール（Samuel Beal 1825-1889）、フランスのビュルヌフ（Eugene Burnouf 1801-1852）、同じくフランスのフェール（Henri Léon Feer 1830-1902）、英国のリス・デヴィズ（T. W. Rhys Davids 1843-1922）、オランダの仏教学者ケルン（Johan Hendrik Kern 1833-1917）など。

在米の親友というより恋人であったエリザベス・ビスランド（後に結婚してウェイトモア夫人）への手紙に、ハーンは日本に来た感動と歓喜にあふれた手紙の末尾に、「私は全身全霊を以て仏教を研究しております（I am studying Buddhism with heart and soul）。」と記しています。

ハーンは、来日前、ニューオリンズに住んでいた時代につぎのような仏教に関係する作品を書いております：

1 「仏教へのおびえ」（“The Buddhistic Bagaboo!” *The Times-Democrat*: January 10, 1884; 『ラフカディオ・ハーン著作集』恒文社、4巻所収）、2 「仏教とは何か」（“What Buddhism Is,” *The Times-Democrat*: January 13, 1884; 同書、5巻所収）、3 「最近の仏教文献」（“Recent Buddhist Literature,” *The Times-Democrat*: March 13, 1885; 同書、5巻所収）、4 「混乱せる東洋学」（“Confused Orientalism,” *The Times-Democrat*: January 10, 1886; 同書、5巻所収）など。

ハーンはどのようにして仏教に関心を持つようになったか。

ハーンの生い立ちと半生をみてみましょう。

1850年 6月27日、当時イギリスの軍医補としてギリシャに駐在していたアイルランド人のチャールズ・ブッシュ・ハーンとギリシャの旧家の娘ローザ・アントニオ・カシマチとの間に、ギリシャのイオニア海に浮かぶイオニア諸島の中の一つの小さい島レフカダ島で次男として出生。（ファースト・ネームのパトリックはアイルランドのカトリックの聖パトリックから命名され、ラフカディオはレフカダ島に由来）

1852年 2歳の頃、母ローザとともにアイルランドのダブリンにある父の実家に引き取られる。（父の実家は厳格なカトリック、母ローザはギリシャ正教徒）

1859年 7歳のとき、父母が離婚。カトリックの大叔母の庇護でフランスとイギリスの学校で学ぶが、カトリック神父に対する反発を経験、左目を失明、その上大叔母が破産。

1869年 19歳のとき、アメリカへ渡る。

1869-1877年 19歳～27歳 シンシナティ時代。苦勞して新聞記者に。（仏教研究に着手）

1877-1889年 27歳～39歳 ニューオリンズ時代（仏教研究本格化）

1890-1904年 40歳～54歳 日本時代（仏教研究仕上げの時期）

（大西忠雄「小泉八雲と仏教」（『へるん』第9号、1970、p. 3）

アメリカに行く際、彼はファースト・ネームのパトリックを捨ててカトリックと決別しました。父方の家での体験からでしょうか、大のカトリック嫌いだったのです。そんな彼に仏教は魅力的だったのでしょうか。

さらに仏教に関心を強めた背景には、19世紀以降のヨーロッパにおける東洋学インド学の隆盛があったことは否定できないだろうと思います。ハーンにもっとも大きな影響を与えたのは、アメリカでもてはやされていたE・アーノルド著『アジアの光』（*The Light of Asia*）でした。著書の題名「アジアの光」とはゴータマ・ブッダのことで、これは韻文で書かれたゴータマ・ブッダの伝記です。

アーノルドはイギリスの詩人でジャーナリストでもあった人物です。弱冠25歳でインドのプネーにあるデカンカレッジの校長として派遣され、3年間滞在。滞在中にサンスクリットとマラーティー語を勉強し、帰国後『デイリー・テレグラフ』紙の主筆になりました。ハーンと同じく東洋学の影響を受けたジャーナリストの一人です。

1883年、その『アジアの光』が再版され、ハーンは友人オコーナーに興奮気味に感想を書いています。「アー

ノルドの『アジアの光』のすばらしい新版をご覧になりましたか。私はすっかり魅了されてしまいました。不思議なほど新しく美しい崇拝の香りで、私の心はすっかり満たされてしまいました。やや深遠な形式の仏教が未来の宗教になるかもしれません。」彼がいかに大きな感動を『アジアの光』から受けたかが分かります。

(以下、次号につづく)

～ コラム「仏教人物列伝」① ～

ゴータマ・ブッダ その一

これから「仏教人物列伝」と題しまして、毎号でコラムを連載していくことになりました。初回はもちろん仏教の開祖「ゴータマ・ブッダ」です。毎号1人ずつと参りたいところですが、このお方だけはどうしても紙面に収まりきれません。次回と合わせて2回か、3回の連載とさせていただきます。

よく「釈迦」という呼称が用いられています。確かに、葛飾北斎の挿絵で有名な『釈迦御一代記図繪』のように、日本ではこの「釈迦」という呼称が古くから用いられていますが、厳密に言えば、これはこのお方の出身部族の名前にすぎませんので、的確に1人の人物を指しておらず、過度の省略と言えます。あのモナリザで有名な画家を「ダビンチ」と呼ぶのも同じことでして、「ビンチ村出身のレオナルド」を意味する「レオナルド・ダ・ビンチ」と呼ぶべきで、「釈迦」もきちんと省略せずに「釈迦牟尼」（「釈迦族出身の聖者」の意）、または「釈迦牟尼世尊」か、その省略の「釈尊」という呼称を用いれば、的確に1人の人物を指すことができます。「ゴータマ・ブッダ」という呼称も可です。

「ゴータマ（ガウタマ）」はこのお方の「姓」にあたりますが、高校の世界史の教科書などでは、本名とされる「シッダッタ」（またはシッダールタ「目的を成就した者」の意）をつけてパーリ語で「ゴータマ＝シッダッタ」、サンスクリット語で「ガウタマ＝シッダールタ」（誤って「ゴータマ＝シッダールタ」とされていることもあります）という呼称が用いられています。「シッダッタ」や「シッダールタ」、他にも「サルヴァールタシッダ」というものもありますが、これらは初期の聖典には出てきません。「目的を成就した者」は、本来は成道後の釈尊の異名であったものが、後世になってから、遡って誕生後の命名式の際に付けられる名前として採用されたと主張する学者もいます。

釈尊の生涯は古来、8つの重要事項を項目に立てて、以下の「八相成道」（八相作仏、八相示現ともいう）に整理して物語る伝統がありますので、今回も釈尊の生涯を紹介するにあたってそれに従うことにします。

八相とは以下の8つの事柄です。

- ① 降兜卒——兜率天から降りる相。
- ② 托胎（入胎）——母胎に入る相。
- ③ 出胎——ルンビニー園にてマヤー妃から誕生する相。
- ④ 出家——王宮から出家する相。
- ⑤ 降魔——正覚の妨害にやって来たマラーを降伏する相。
- ⑥ 成道——6年の苦行を経て菩提樹下にて無上等正覚を得る相。
- ⑦ 転法輪（初転法輪）——成道以後、法を説いて人と天を教化する相。
- ⑧ 入滅（入涅槃）——80歳で沙羅双樹の下で涅槃に入る相。

ただし托胎と出胎の間に住胎（母胎にあって説法する相）を入れて、かわりに降魔を省く数え方もあります。

①降兜卒——次の生涯でブッダになることが決まっている一生補処の菩薩は、かならずトウシタ天の神さまになります。そして天界の神さまの死の兆候（五衰）があらわれると、次に生まれ変わるべき場所と環境を決定するために「大なる観察」をします。この観察によって、人間の寿命が長すぎて10万歳以上の時代や、逆に短すぎる100歳以下の時代や、辺境の地や、クシャトリヤとバラモン以外のカーストや、酒飲みの母などを避けます。人間の寿命に関しまして、長すぎるのはいけない理由としては、そこまで長寿の人々には無常・苦・無我が理解

できないからで、短すぎるのも、人々に修行する暇がないということで避けられます。もともと、8万歳でも十分長いですが、過去七仏の一番目のヴィパッシ仏は人壽8万歳の時代に出現しましたので、8万歳は可ということになります。また母については、酒を飲まないなどの条件の他に、妙な話かもしれませんが、その時点で「あと10ヶ月と7日」の寿命の女性が母に選ばれます。というのも、ブッダたるもの、母胎に宿るのははっきり10ヶ月であって、その母は出産後7日で必ず亡くなるとされているからです。

②托胎（入胎）——そして、トッシタ（兜卒）天での寿命が尽きると天界から降りてきます。菩薩が白い象になって母胎に宿るとご存知の方も多いでしょうが、実はこれについては古来議論がありまして、それは菩薩ともあろう者が、最後の最後にどうして畜生の身を受けることがあるのか、という疑問がもたれたからなのですが、反対意見としては、白い象がお腹に入るのをマヤーが夢で見ただけとか、白い象に乗って降りてくるのであって本人が象になるのではないといったものがあります。

③出胎——マヤーは出産のために里帰りの途中だったとも言われておりますが、ルンビニーというところに立ち寄り、サーラ（沙羅）樹とかアソーカ（無憂）樹とされる樹の枝を折ろうと、右手を枝にかけると、マヤー妃の右脇から菩薩が誕生します。これ以外は知らないというくらい有名な話かもしれませんが、実をいうと、このことに関しても古来意見が分かれています。たとえば、スリランカ・ビルマ・タイに広まった南方上座部では右脇から誕生したとは伝えられていません。ただし母は立った状態で菩薩を出産しなければならないとされていますので、その点では、右脇から生まれたことを主張する人たちと意見が一致しています。

④「出家」以降は次号とさせていただきます。お気がつきのように、現代人にとっては重要事項となる「結婚」が八相には含まれておりませんが、「出家」のところで紹介します。

（インド哲学科講師 岩井昌悟・仏教会事務局長）

～ コラム「日本文化と仏教」① ～

恵心源信、水になる

仏教思想は日本文化の地下水である。日本の風土の奥底に脈々と流れ、日本人の心を浸し、文芸や芸能を芽吹かせ、育み、花咲かせた。その時代時代のさまざまな花である。素朴な伝承や仏教説話にも、泣き、笑い、悔やみ、願う切実な思いが透けて見える。

長く西行の作と信じられていた仏教説話集『撰集抄』に「恵心僧都水観保胤入道枕事」という奇妙な話がある。恵心僧都は日本浄土教の祖で『往生要集』を著した源信(942—1017)。保胤は陰陽道・天文・暦学の家である賀茂氏の出の文人貴族慶滋保胤(931頃—1002 出家して寂心と号す)。『日本往生極楽記』の著書で、恵心について浄土信仰を深めていた。

あるとき、内記入道(保胤)はつれづれ往生の話など語り合おうと、恵心僧都がいる比叡山の横川へ出かけていった。僧都が住む坊の扉を開けると、なんとしたとか、部屋一面、水が湛えられていて、僧都の姿はどこにも見えない。

保胤は驚きながらも、なにか理由があるものと考えて出直すことにしたが、ふと隅に木枕が放置されているのが目にとまり、無造作に水の中に投げ入れて帰った。

翌日、保胤がふたたび坊を訪ねると、恵心僧都は対面して言った。

「それがしの胸の内に貴方が枕を投げ入れ給うたゆえ、実に心悪く存ずる。とり除いて下され」
保胤もなかなかの人物だったから、すぐに昨日のことと心得て、「とかくの御指図には及びませぬ」

詳しくおっしゃらずともわかっておりますと応えた。僧都は「嬉しく存ずる」と言い、暫く目を瞑っていたが、やがてその身が消え消えに薄れて、水と化した。

水は一室を浸して烈しく波打ったが、保胤の身はいささかも濡れない。(恵心僧都が行った観法は、『観経』十六観の第二、いわゆる水想観にて、浄土の清らかな水を観想する法術という)。

見守っていると、枕がぷかりと水面に浮かび出た。保胤はおもむろにその枕を取り上げ、障子の外へ放り投げた。ややあって僧都は旧の姿に復したが、寔に以て不思議なことではあるまいか。

(広本巻七の第六)

ここに出てくる『観無量寿経』十六観法は、第一に、日没を觀じて西方浄土を思う「日想観」。次の「水想観」には三段階あり、まず極楽浄土の清らかな水を觀る「水の觀法」。恵心僧都がおこなっていたのがこれである。經文には、水を觀じたら、その映像がはっきり残っているようにして、想念がかき乱されないようにしなくてはならないとある。ところが恵心は自身が自在に水になれるまでところまで到達しているのに、枕を投げ入れられたせいで苦しむはめになった。同じような逸話が中国にも日本にもあるから、作者はそれをヒントにして恵心の話にしたのであろうが、異物は自分では取り除けないというのが面白い。

水想観は水を觀終ったら、次に透き通った氷を觀る「氷の觀法」。さらに青玉の大地とダイヤモンドはじめ七宝と黄金で莊嚴されて五百色の光がきらめく光明台を想像する「青玉の觀法」へと進む。そこには百の宝石からなる千万の樓閣がある。光明台の両側にはそれぞれ百億の花の幢幡と無数の樂器が飾られていて、八種の風が光明から吹きおこり、この樂器を鳴らして、苦・空・無常・無我についての教えを聞かせるという。恵心僧都もそこまで進んでその音色を聴いたという話があれば、もっと面白かったのだが。

(大学院仏教学専攻博士前期課程2年 永田道子)

～ 書籍・イベント紹介 ～

《書籍》

- ・『**仏教がわかる四字熟語辞典**』
森章司、小森英明/編 (東京堂出版 3,300円)
インド・中国・日本の主要な仏教文献から四字熟語を採集し、その意味、根底にある仏教の教え、文化的・思想的背景、ニュアンスなどをわかりやすく解説。
- ・『**インドからの道 日本からの道―「日印交流年」連続講演録―**』
前田専学/監修 (出帆新社 2,940円)
仏教発祥の地インドと、日本の12世紀に亘る日印文化交流史を紹介。
- ・『**Shobogenzo : the True Dharma-Eye Treasury Vol.3** (英訳『正法眼蔵』)
西島愚道と夫、Chodo Cross (仏教伝道協会 6,500円)
道元『正法眼蔵』の英訳(第三巻目)が(財)仏教伝道協会の英訳事業の一環として刊行された。難解な哲学書ともいえるが、英訳であるために明晰になっている部分もあり、注目される。
- ・『**弘法大師 空海―その全生涯と思想―**』
長盛順二/著 (東京図書出版 1,575円)
真言宗の開祖空海の実像を生き生き描き、難解な密教思想について解説。
- ・『**ライバルのいない世界―ブッダの実践法**』
アルボムッレ・スマナサーラ/著 (国書刊行会 997円)
争いの元凶はライバル意識にあり、争いのない自己・社会を築くための誰にでもできる実践方法をイラスト入りで示す。
- ・『**仏像の見方**』
澤村忠保/著 (誠文堂新光社 2,100円)
仏像の歴史、種類、造り方などの基本情報まで、仏像の世界を理解する入門書。
- ・『**いのちの大地に樹つ【現代真宗入門講座】**』
谷川理宣/著 (法蔵館 2,520円)
親鸞『教行信証』の構造に従いつつ、悪人正機・往生浄土等の浄土真宗の教えを現代の闇を導く救済原理として明かす。
- ・『**禪に問う一人でも悠々と生きる道**』
形山睡峰/著 (大法輪閣 1,890円)
「公案」を現代の言葉で具体的に紹介。深遠な哲学・科学にも自在に対応できる普遍的な道理のあることを説き明かす。
- ・『**後世の一大事**』
宮城頭/著 (法蔵館 1,050円)
死後の世界・来世としての「後世」の問題を問うのではなく、死さえも受け入れた上で、今をどのように生きていくのか、

という「一大事」について語った法話集。

●『にわぜんきゅうのだれでも描けるお地藏さま』

にわぜんきゅう/著 (エフェー出版 1,470円)
誰にでも素朴なお地藏様描けるように説明。「お礼状や年賀状に添えて、敬老の日等の贈り物に」と楽しみ方は色々。

《イベント》

秋から冬にかけて行われる仏教イベントです。

●浅草寺 特別公開「大絵馬寺宝展と庭園拝観」

通常、非公開の伝法院庭園と、浅草寺に伝わる寺宝の数々を一般公開。

日時：10/15 (水) - 11/16 (日) 10:00~15:00

会場：五重塔院特別展示館、伝法院庭園

拝観料：300円

●東京国立博物館 特別展

「スリランカー輝く島の美に出会う」

仏像やヒンドゥー神像、仏具などの宗教芸術や、美しい宝石をあしらった宝飾品など、国宝級の作品を含む約 150 件、スリランカの粋を一堂に集めて展覧。

日時：9/17 (水) - 11/30 (日)

9:30~17:00 (金曜は 20 時、土日祝は 18 時まで)

※休館日は月曜日。祭日により変動するので要確認。

会場：東京国立博物館表慶館 (上野公園)

拝観料：一般 1,200 円、大学生 1,000 円

●東京国立博物館 特集陳列「那智山出土仏教遺物」

熊野三山のひとつ那智山の参道から出土した仏像、鏡像、仏具など、仏教に関係する遺物を陳列。注目は、金剛界曼荼羅の中心、成身会を構成する仏像や、諸尊の持物などを表す三昧耶形。

日時：7/29 (火) - 11/16 (日)

※休館日は月曜日。祭日により変動するので要確認。

会場：東京国立博物館本館 14 室 (上野公園)

拝観料：一般 600 円、大学生 400 円

●雑司ヶ谷鬼子母神「御会式大祭」

御会式 (おえしき) は、もともと日蓮聖人の忌日の法会。江戸時代から伝わる年中行事として静かな雑司ヶ谷の街一帯に太鼓が響き渡り、参道は露天で大賑わいとなります。

日時：10/16 (木) - 18 (土)

場所：東京都豊島区雑司が谷 3-15-20

●品川海雲寺「千体荒神祭」

江戸時代から「かまどの神さま」として親しまれ、護摩や大般若転読の法要ではお札や財布を加持する。また、参道には「かまど」にちなんだ名物「釜おこし」をはじめ、約 100 軒の露天が並ぶ。

日時：11/27 (木) - 28 (金)

場所：東京都品川区南品川 3-5-21

●『値遇 私を変えた仏縁・人縁』

松倉悦郎/著 (ソニー・マガジズ新書 861 円)
アナウンサーとして大いに活躍しながら、定年を前にして突然、仏門へ。人生において、新たな見方、考え方をもたらしてくれたのはいつも「出会い」だった。

●善光寺 法要「十夜会」

經典『無量寿経』「この世において善を修すること十日十夜すれば、他の諸仏の国土において善を為すこと千歳に勝れり」という一節に基づき、10 日間にわたって修される夜の法会。普段は非公開の「十夜仏」をご本尊様の前に遷座し、開扉して供養が行われる。

日程：10/5 (日) - 14 (火)、11/5 (水) - 14 (金)

開始時刻：19:00

●第 24 回世界仏教徒会議日本大会 (主催：WFB、世界仏教徒連盟)

「仏教者の社会問題解決への貢献」をテーマとして、開催期間中の 15 日には七つのシンポジウムの開催と映画の上映、16 日午前 10 時からは浅草寺本堂にて世界平和法要が行われる。また、第 15 回世界仏教青年会議、第 7 回世界仏教大会会議も併せて開催される。

日時：11/14 (金) - 17 (月)

会場：浅草寺および浅草ビューホテル (台東区西浅草 3-17-1)

このイベントに関する詳しい情報は

<http://www.jbf.ne.jp/pdf/shinpo.pdf/>

もしくは

<http://www.jyba.jp/> でご覧ください。

仏教会会員さん推奨の行事・情報案内です。

●講演「シスター・チャンドラとシャクティの踊り手たち」

今年ヒューストン国際映画祭で金賞を受賞した『シスター・チャンドラとシャクティの踊り手たち』。この映画の主人公であるシスター・チャンドラが、日本社会貢献支援財団から表彰されることになり、シャクティの踊り手たちをとめない来日、講演する。

日時：11/11 (火)・12 (水)、①15:00、②18:30

会場：東京ウィメンズプラザ ホール (青山国連大学隣)

東京都渋谷区神宮前 5-53-67

参加費：3,000 円

連絡先：Tel 043-293-2828、Fax 043-293-2869

この映画やイベントに関する詳しい情報は <http://sakthi.luci.jp/> でご覧ください。

●臨済禅 黄檗禅公式サイト「臨黄ネット」

ホームページ上に日曜法話や特別公開、坐禅会や各種講座など、臨済宗黄檗宗の情報が随時紹介されます。

「臨黄ネット」<http://www.rinnou.net/>

他にもありますが、掲載できません。残念です…

「仏報ウォッチリスト」を参考して下さい。

<http://d.hatena.ne.jp/buppo/>

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。(会員は無料です。)

《定例全体研究会》

活動報告や渡辺先生の講義「大智度論を読む」などを行います。

※当初お知らせした日程を変更させて頂きました。ご確認ください。ご了承下さい。

第6回 バイカル先生(桜美林大学准教授)講演
「モンゴル仏教の今」

日時: 10月25日(土) 15:00～16:00

場所: 6405教室(白山校舎6号館4階)

(聴講無料)

第7回 11月26日(水) 10:30～12:00、第3会議室(白山校舎6号館1階)

第8回 12月13日(土) 15:30～17:00、6403教室(白山校舎6号館4階)

《語学勉強会》

※日程については要確認。いずれの講座も初級者の参加が可能です。

○サンスクリット語文献の読書会

次回開催日: 10月15日(水)

講師: 出野尚紀

日時: 隔週水曜日 13:00～14:30

場所: 文学部会議室(白山校舎6号館4階)

内容: インドの説話文学の講読

○チベット語仏教文献の読書会

秋学期開始日: 10月11日(土)

講師: 石川美恵

日時: 隔週土曜日 14:00～15:30

場所: インド哲学科共同研究室(白山校舎6号館4階)

内容: 初等文法を兼ねたチベット語仏教文献の講読

○漢文仏典講読会—『成唯識論』を読む—

秋学期開始日: 10月9日(木)

講師: 橘川智昭

日時: 隔週木曜日 14:40～16:10

場所: 5501教室(白山校舎5号館5階)

内容: 『成唯識論』を読みながら、漢文と仏教思想を学ぶ

《各種研修》

○第1回「東洋大学の史跡を歩く」

湯島の霊雲寺や麟祥院から両国の勝海舟石碑や江戸東京博物館まで、東洋大学にゆかりのある史跡を中心に巡ります。終了後は懇親会を予定していますのでご都合のよろしい方はぜひご参加下さい。ツアーガイドは出野尚紀先生(仏教会幹事)。

日時: 10月18日(土) 10:00～17:30

集合場所: 10時に東洋大学正門前

費用: 参加費は無料です。その他、実費でバス料金(一日乗車券500円)、昼食代、懇親会費がかかります。

※参加希望者は以下のアドレスまでご連絡下さい。

※紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、以下のアドレスまでご一報下さい。

※現在新入会員を募集しています。入会希望者は以下までご連絡下さい。

※会員規約や活動内容などの詳細はホームページ(<http://www.toyo-yimba.org>)をご覧ください。

東洋大学仏教会

卒業生、一般: 年会費 3000円、特別賛助一口 5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com URL: <http://www.toyo-yimba.org>

東洋大学仏教青年会

学生: 年会費 1000円

東洋大学仏教青年会会長 櫻井宣明

db0600029@toyonet.toyo.ac.jp